

読

名教
大教

度

名教
直杉

杉

杉

特長

した、
です。

語知識が

る、効

トやコ

き

特長

やすさ、

メージを

しました。

じた豊富

を特にく

プ

1本)

ろい

南2-3-2

●モノグラフ

小学生ナウ

修学旅行

vol.5-3



目次

論旨	修学旅行	深谷昌志 土橋健二	2
修学旅行の現代的な意義			2
要約			4
1. サンプル校の概要			6
● 調査概要			6
● サンプル校のプロフィール			7
2. 修学旅行の全体像			8
● 修学旅行のT.P.O			8
3. 修学旅行の行き先と日程			13
● 行き先ベスト10			13
● 各地の旅行圏			14
● 都道府県別マップおよび日程			15
● 学校はどこまで決めるのか			17
4. 修学旅行のもつ意味			27
● 修学旅行の価値			27
● 価値の実現			29
● 子どもが主体となっているか			30
● 実施してみても			32
5. 理想の修学旅行			33
● なぜ修学旅行は変わらないのか			33
● 変化のきざし			35
まとめに代えて			39
シリーズ/講座・子ども調査入門 ⑨			
地域差		深谷昌志	40
資料1 日程図(1~57)			45
資料2 調査票見本および集計表			66

調査レポート／修学旅行(全国調査)

放送大学教授 深谷昌志

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

筑波大学研究生 庄 健二



修学旅行の現代的な意義

放送大学教授

深谷昌志

教育界は昨年来、臨教審を中心に揺れ動いている。教育の自由化論などの論議は、従来の教育の弊害を説くあまり、新たな問題を生みだす危険性を感じる。そうした反面、臨教審への論議をきっかけとして、これまで意識されなかった領域に目が注がれ、新たな反省をふまえて、内容の充実が図られるものも多かろう。

従来から当然のように思われてきた修学旅行も、聞けば、欧米の学校では実施されていないとか。そう言われてみると、修学旅行の存在そのものが疑問に感じられてくる。

あらためてふれるまでもなく、かつての社会で、修学旅行の果たした意味が大きかったのはたしかであろう。とくに、交通手段の不

便だった時代には、生まれた土地で一生をすごす人が少なくなかった。それだけに、学校を卒業する前後に、一生の記念として友とともに旅をする体験は、学校の授業以上に一生の記念となろう。

そうした意味をもっているだけに、修学旅行のルーツを探ると意外に古く、すでに明治20年代の初めに、修学旅行を実施した事例が認められる。

この4月に『子ども考現学』を出版したので、くわしくは同書を手にしてほしいが、その中で、埼玉県の飯能高等小学校の場合、「明治24年、校長と教頭とが23人を引率し、神奈川県下御嶽山に登り、1泊して帰る。明治26年3月25日～29日、教師2人が20名を引率し、

25日、川越より夜船に乗り、浅草着、27日上野見物、28日皇居や市内を見て回り、29日靖国神社を参拝して夜遅く、帰校」（『埼玉県教育史』第4巻）などとなっているし、長野県上水内高等小学校では、茶臼山や牧ノ島城址などを2泊3日で走破する修学旅行を実施している。ただし、「前後3日行程24里、陰山ヲ越へ深谷ヲ巨ルモノ数次1行24人中1人ノ馬脚ヲ借り人肩ヲ煩ハシタルモノナク」（明治24年、『長野県教育史』第11巻）のとおり、交通の発達していない時代らしく、全行程が徒歩で占められ、現在の新幹線や特急を利用するものとは全く異質の旅行となる。

このように、明治20年代の初め、高等小学校を中心に、遠足を延長したかたちで、徒歩に頼って、やや遠くの町や観光地へ出向いて行く泊まりがけの旅行が修学旅行の原初形態となる。ただし、修学旅行は、必ずしも、最終学年に限らず、上級学年の有志が参加するかたちがとられていた。

それだけに、交通の便がよくなるにつれて、修学旅行の行き先が変わってくるだけでなく、旅の雰囲気も異なってくる。

例えば、三重県朝明郡第一高等小学校では、明治24年5月6日から4日間、高等科3～4年33名が、教員3名、村長や父兄など7名に率いられて、京都旅行を行っている。

第1日、河原田—（汽車）—草津—瀬田—（昼食、舟）—石山寺—馬場—（汽車）—伏見稻荷—東福寺—三十三間堂—豊国神社—五条（泊）—京極の夜見学
第2日、二条城—北野神社—金閣寺（昼食）—御所—産業博物館—東本願寺—西本願寺—宿で泊る

（『三重県教育史』第1巻）

この前後から、新潟県では、交通網の整備とともに、遠足に汽車を利用する形が一般化し、それと同時に、修学旅行を実施する学校が多くなり始めている。しかし、明治22年、新橋—大阪間に開通した鉄道の普通運賃は3

円56銭で、これは東京府下の1戸建ての家賃35銭のほぼ10倍にあたる。したがって、現代の貨幣価値に換算すると、40～50万円程度になる。また、そのころ、理髪代は5銭なので、その約70人分、つまり20万円程度、さらに、かけそば一杯1銭に換算すると、15万円強となる。（週刊朝日編集部編『値段の風俗史』）

したがって、修学旅行は、費用を安くするために、運賃の割引制を利用したり、期間を短めにする、あるいは、こづかいやみやげを制限するなどの工夫をこらして、徐々に学校行事の中に定着するようになった。

しかし、子どもをとりまく状況は大きく変わった。テレビなどをとおして、さまざまな情報が視覚に訴えるかたちで茶の間に飛び込んできると。そのうえ、家族単位での旅が日常化している。そうだとすれば、未知の世界に旅するという修学旅行の意味はなかば失われたと言っても過言であるまい。

しかし、友との遊び体験を欠きがちな子どもたちの現状を考えると、修学旅行のもつ友とのふれ合いや心身の鍛練的な意味が、従来の副次的なものから主目的へと変わった印象を受ける。その際、行き先はどこでもよい。都市部の学校なら、自然に恵まれた環境を選び、2～3泊の予定で、心ゆくまで、ソフトボールをしたり、山道の散策をするなどが考えられる。また、山村部の場合、村から出荷された果物のゆくえを追って、大都市圏の市場や加工工場、デパートなどを見学して回るのもよい。さらに、旅行の共通のテーマに「体力へのチャレンジ」を掲げ、機会のあることに、歩かせたり、ゲームをしたりするプログラムもあってよからう。いずれにせよ、修学旅行といえ、日光、そして、京都・奈良というパターンからの脱皮が必要であろう。そうした状況を、学校はどうとらえているのか。そうした問題意識に立って、修学旅行についての全国調査を行うことにした。

要約

① 修学旅行の姿

小学6年の5月に、1泊2日、費用は1万4千円強というのが、修学旅行の平均値となる(表2、3、4)。



② 旅行の行き先

東北は仙台、関東は箱根・鎌倉、近畿は京都・奈良、北九州は長崎のように、旅行の行き先は地域によって集中している(地図13)。



③ 旅行の変更

過去6年間に、修学旅行先を変更したのは、多い県でも3割程度で、あまり大きな変更をしていない学校が大半を占める(地図17)。



④ 修学旅行の意義



文化遺産の実物にふれられるし、それに、集団生活の体験を積めるという両面から、旅行の意義をとらえている(図4)。

5 子どもの意見

グループを作るときに子どもの意見を尊重するが、あとは自由時間の過ごし方に、子どもの考えを参考にしている程度である(図6)。



6 引率教師の気持ち

疲れるが、しかし、やりがいがある(図9)。



7 修学旅行の見通し



「現在の姿をそのまま保ち、これからも廃止されないだろう」が、7割を超える(図10-1)。

まとめ

修学旅行は曲り角を迎えたと言われる。見知らぬ土地へ行き、実物を見るという旅行の意義は薄れ、それと比べ、集団生活の体験を積み意味が増し始めている。それだけに、旅行の内容が変わってよいのと思うのに、伝統的なパターンを脱していないという印象を

受ける。それと同時に、旅行の形が画一化されて、学校ごとの個性に欠ける感じもする。学校の画一化が問われている現在だけに、修学旅行は、子どもや地域の状況を生かし、もっと個性豊かなものを作ってほしいと思う。

調査概要

期間 ● 昭和59年12月

方法 ● 都道府県ごとにほぼ10分の1の小学校を抽出し、質問紙を郵送

対象 ● 全国の小学校の教頭ないし修学旅行担当の教師

サンプル数 ● 920校

1. サンプル校の概要



調査概要

対象 ● 全国の小学校の教頭ないし修学旅行担当の教師

期間 ● 昭和59年12月

方法 ● 都道府県ごとにほぼ10分の1の小学校を抽出し、質問紙を郵送し、回答を求めた。

対象校数 ● 2,500校

回収校数 ● 920校

回収率 ● 36.8%

都道府県別調査校数 ● 地図1に示したとおりである。

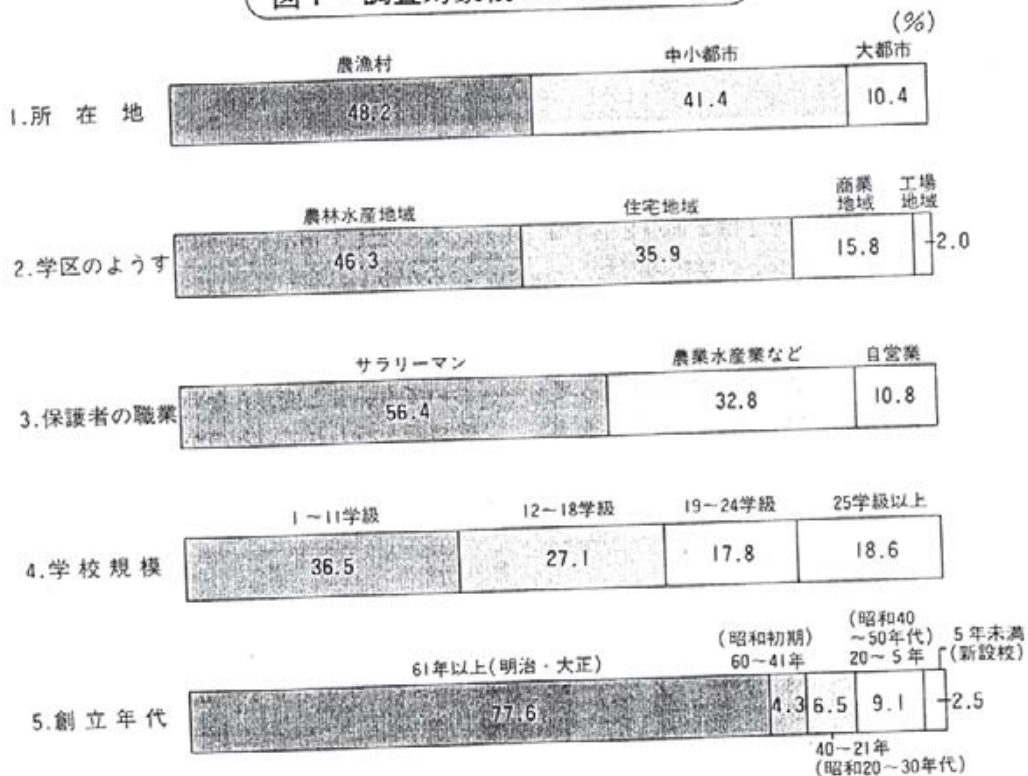
サンプル校のプロフィール

昭和59年度の日本の小学校の数は25,064校、児童数は11,465,108人で、児童数を単純に小学校数で割ってみると、およそ1校平均で457人、さらに6学年に均等に児童がいると仮定するならば、1学年で約76.2人となる。すなわち、1学年に2学級となり、この平均の上での小学校は小規模校となってしまう。

今回の調査のように、日本の全小学校を母

集団とする場合、サンプルとした学校が、正しく小学校の縮図となる必要があろうが、図1の4.によれば、学級数が18以下の学校が64%を占めており、サンプル校は小規模校が多いことがわかる。しかも、所在地は農漁村が48%を占め、学区のようすも農林水産地域が46%と多くなっている。ここらが、統計的にみると、日本の学校の平均値なのであろう。

図1・調査対象校のプロフィール



2. 修学旅行の全体像



われわれのイメージする修学旅行とは、京都や奈良などの観光地を1泊2日か2泊3日の日程で、貸切りバスなどで学級の友だちと一緒にかけめぐり、大部屋で遅くまで教師の目をかすめてまくら投げやふとんむしをして遊び、翌日、ほとんどバスの中では眠っている、そういうものであった。しかも、食事はおしなべてまずかったが、それでも、友だちと一緒に旅行し、一緒に食事をし、一緒に

眠る、そういった楽しみは、べつに修学旅行でなくとも、宿泊を伴う旅行であればよかったのかもしれない。

このように考えてくると、修学旅行の意義に疑問が生じてくる。そして、現在の学校においても、昔と変わらないような伝統的な修学旅行が行われているのかが知りたくなってくる。

修学旅行のT.P.O

そこで、修学旅行の全体像を明らかにしていくために、ここでは、①誰が（旅行に行った児童数や引率教師の人数など）、②いつ（旅行の実施月）、③どのくらいの期間（旅行日数）、④旅行費用（子どもの負担額やこづかいの金額など）、⑤どこへ（行き先）に分けて、それぞれをみていくことにしよう。

①誰が（旅行に行った児童数や引率教師の人数など）

旅行に参加した児童の人数は、平均で99人（ほぼ3学級程度）であり、引率の教師は6人（3学級の担任教師プラス養護の教師1人・校長・5年生か専科の教師1人と考えられる）、PTAなどの同行者は2人となっている

(表1)。

しかし、参加する児童の人数などは学校規模によって異なると考えられるので、学校規模別の平均値をみると、学級数が1から11しかない単・複式学級校では、旅行に参加した児童の人数は32人(ほぼ1学級程度)、引率の教師は4人に対して、大規模校では204人の児童が参加し(ほぼ5学級程度)、引率の教師も10人にのぼっている。

②いつ(旅行の実施月)

表2は修学旅行の実施月について、過去数年間をさかのぼって回答を求めたものである。昭和54年から59年にかけてもほとんど変わらなく5月が多く、半数ちかくの小学校で5月に

旅行が行われていることがわかる。これに対して、2学期の9月、10月、11月は各年とも20%程度にすぎず、小学校6年生の5月に旅行をするのが、もっともポピュラーであるようにみえる。

③どのくらいの期間(旅行日数)

しかも表3によれば、昭和54年から59年に至るまで、1泊2日の日程が80%ちかくを占めており、小学校6年生の5月に1泊2日の修学旅行を行うのが修学旅行のパターンとなる。しかもきわめて日程の変化に乏しく、たとえば、日数が増えるのは行き先が遠くなった場合(日程表1)と、公的施設を利用するようになって宿泊費に余裕のできた場合

表1・修学旅行の人数、費用(昭和59年度)

学校規模	単・複式	小規模	中規模	大規模	全体平均
クラス数	1~11	12~18	19~24	25以上	
旅行に行った児童数(人)	31.87	94.21	137.70	204.50	99.44
引率教員数(人)	3.78	6.02	7.56	10.18	6.24
同行者数(人)	2.12	1.60	1.85	2.38	1.96
子どもの負担(円)	14,893.08	14,415.99	13,222.10	12,800.02	14,077.2
補助金(円)	4,891.96	1,369.24	3,299.19	4,184.50	3,779.74
子どものこづかい(円)	3,436.47	2,902.56	2,681.51	2,556.34	3,000.43

表2・修学旅行実施月

昭和	月											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
54年	0.0	0.0	0.0	12.7	(50.8)	11.4	2.2	1.0	4.2	14.9	2.3	0.5
55年	0.0	0.0	0.0	11.9	(49.9)	12.3	2.9	0.8	4.3	15.6	1.8	0.5
56年	0.0	0.0	0.0	11.4	(50.0)	12.2	2.3	0.9	4.8	15.6	2.5	0.3
57年	0.0	0.1	0.0	12.5	(47.5)	13.1	2.5	0.9	3.7	15.3	4.0	0.4
58年	0.0	0.1	0.0	12.4	(46.3)	14.9	2.2	0.9	4.4	14.4	4.0	0.4
59年	0.0	0.1	0.0	12.4	(47.2)	13.1	3.2	0.9	3.5	14.2	5.0	0.4

○は最大値

(日程表2)と、行き先は同じでも学校の意向によって日数を増やす場合(日程表3)があるが、918校中12校しかこのような学校はなく、残りの大多数の学校は変化がないか、むしろ日数の減った場合(日程表4)すら認められる。

④費用(子どもの負担額やこづかいの金額など)

ところが、子ども1人当たりの負担額をみると、全体の平均14,000円に対して、単・複式学級校14,900円、小規模校14,400円、中規模校13,200円、大規模校12,800円と、大規模校のほうが負担が少ない。なお、子どものこづかいの金額は、単・複式学級校が3,400円に対して、大規模校では2,500円にすぎない。小規模校は大規模校より人数が少ないので、小規模校ほど修学旅行にお金をかけ、あるいはお金がかかり、しかも、子どものこづかい

の金額も多いという傾向が得られている(表1)。

なお、子ども1人あたりの費用を年度別にみると、1泊2日の日程は変わらないものの、物価の上昇にしたがって上昇し、この6年間に、3千円ほどよけいに費用がかかり始めている(表4)。

⑤どこへ(行き先)

地図2は、全調査校の修学旅行の行き先をあげたものである。この地図によれば、仙台・松島や日光や京都・奈良といった地域はもちろん、北は北海道の阿寒・釧路から、南は沖縄の石垣島・西表島に至るまで、対象地が分散していることがわかる。修学旅行といえば日光や京都・奈良という時代は過ぎ去ってしまったのであろうか。つぎに、行き先と日程について、もっとくわしくみていくことにしよう。

表3・旅行日数

昭和	年	日数 (%)					
		1日 (日帰り)	2日	3日	4日	5日	6日以上
54	年	2.0	78.6	17.9	1.3	0.2	0.0
55	年	2.3	78.5	17.6	1.3	0.3	0.0
56	年	1.6	79.0	18.0	1.3	0.1	0.0
57	年	1.9	78.6	18.0	1.3	0.1	0.1
58	年	1.8	77.7	19.0	1.4	0.1	0.0
59	年	2.0	77.7	18.6	1.5	0.1	0.1

○は最大値

表4・子ども1人あたりの費用

昭和	費用	平均(円)	昭和	費用	平均(円)
54年		11,540	57年		13,280
55年		11,980	58年		13,670
56年		12,740	59年		14,310

日程表1 兵庫県

実施年 (昭和)	実施月	主な行き先	主な交通手段	宿泊日数	子ども1人 あたりの費用
例	9月	東京	新幹線	2泊3日	12,000円
54年	4月	伊勢・志摩	バス	1泊2日	8,000円
55年	5月	伊勢・志摩	バス	1泊2日	9,000円
56年	10月	大山・蒜山	バス	2泊3日	14,000円
57年	5月	大山・蒜山	バス	2泊3日	15,000円
58年	5月	大山・蒜山	バス	2泊3日	15,000円
59年	5月	大山・蒜山	バス	2泊3日	16,000円

日程表2 京都府

54年	5月	伊勢志摩方面	近鉄特急	1泊2日	11,500円
55年	5月	伊勢志摩方面	近鉄特急	1泊2日	12,000円
56年	5月	伊勢志摩方面	近鉄特急	1泊2日	12,000円
57年	5月	野外教育センター	近鉄特急	2泊3日	7,000円
58年	5月	野外教育センター	近鉄特急	2泊3日	7,500円
59年	5月	野外教育センター	近鉄特急	2泊3日	8,000円

日程表3 愛媛県

54年	5月	秋吉台・下関方面	貸切船・貸切バス	1泊2日	13,000円
55年	5月	秋吉台・下関方面	関西汽船・防予汽船 貸切バス	2泊3日	15,500円
56年	5月	秋吉台・下関方面	関西汽船・防予汽船 貸切バス	2泊3日	15,600円
57年	5月	秋吉台・下関方面	関西汽船・防予汽船 貸切バス	2泊3日	16,000円
58年	5月	秋吉台・下関方面	関西汽船・防予汽船 貸切バス	2泊3日	16,300円
59年	5月	秋吉台・下関方面	関西汽船・防予汽船 貸切バス	2泊3日	17,800円

日程表4 広島県

54年	5月	中九州	新幹線・バス	2泊3日	円
55年	5月	中九州	新幹線・バス	2泊3日	円
56年	5月	中九州	新幹線・バス	2泊3日	20,000円
57年	5月	中九州	新幹線・バス	2泊3日	円
58年	5月	山口	新幹線・バス	1泊2日	円
59年	5月	北九州	新幹線・バス	1泊2日	16,000円

地図1

都道府県別にみた調査対象校数
(全対象校数=920校)



地図2

修学旅行の行き先



3. 修学旅行の行き先と日程



修学旅行の行き先が全国に分散していることは前にのべたが、やはり、それらの行き先のなかでも、「修学旅行のメッカ」とよぶに

ふさわしい地域が存在していると考えられる。そこで、旅行の行き先についてもっとくわしくみてみる必要があるであろう。

行き先ベスト10

この表5は、修学旅行の日程のなかに、その地域での観光などが含まれている場合、その地域への修学旅行とみなし、全調査校のなかで、その地域にどのくらいの学校が旅行しているかを順にならべたものである。なお、日程のなかに2つ以上の地域が含まれている場合、たとえば、奈良と京都の場合、それぞれの地域の集計に含めた。

10位までの数値を求めてみると、上位には奈良・京都がきており、以下、神奈川、栃木、三重などのオーソドックスな地域の名前ががっている。カッコの中は主な名所、旧跡な

ど、日程にみられるものをのせておいた。

もっとも多い奈良ですら、全調査校920校のうち日程、行き先不明の2校をのぞく918校を分母としたなかの154校17%程度でしかないとも考えられるが、1泊2日の日程、経済的制約、地理的距離などを考慮するならばそれほど少ないとは言えないかもしれない。そこで、こうした地域へ、どこの都道府県の小学校が、どのくらいの割合で旅行しているのかをみたものが、次の地図の3から12である。表5の1.奈良から10.長崎まで順にみていこう。

表5・行き先ベスト10

(%)

1. 奈良（法隆寺・東大寺大仏殿など）	16.8
2. 京都（清水寺・映画村など）	14.9
3. 神奈川（鎌倉・箱根など）	9.3
4. 栃木（日光・足尾など）	8.0
5. 三重（伊勢神宮・真珠島など）	7.0
6. 東京（皇居・NHKなど）	6.3
6. 大阪（大阪城・エキスポランドなど）	6.3
8. 広島（宮島・平和公園など）	5.9
9. 宮城（仙台青葉城・松島など）	5.4
10. 長崎（雲仙・平和公園など）	4.7

各地の旅行圏

まず地図3は、1校でも奈良への旅行を行った都道府県をすべて示したものである。たとえば、神奈川県で奈良に旅行した小学校は1校だけで、神奈川県の調査校のうち4.3%を占めていることをあらわしている。これに対して、福井、和歌山、香川県の調査校はすべて奈良を旅行しているということになる。

この地図によれば、奈良への旅行圏は、東京、神奈川、岐阜、愛知、福井、滋賀、三重、京都、和歌山、兵庫、鳥取、岡山、広島、香川、徳島、高知、福岡に広がっており、特に、福井、和歌山、香川では100%ときわめて高くなっている。修学旅行の行き先が全国に分散している現在においても、かなりの人気を集めていることがうかがえる。

奈良と同様な傾向が、地図4の京都についてもみられる。これは、多くの学校が奈良と京都を含めた日程を作り、奈良から京都へ、あるいは京都から奈良へと移動するからであろう（日程図30・34・36・37などに典型的なコースを示した）。

つぎに、関東における「修学旅行のメッカ」神奈川（箱根・鎌倉など）と栃木（日光・足尾など）をみてみることにしよう。まず、地図5は神奈川への修学旅行の範囲を示したものであるが、やはり、関東地方（群馬、栃木、千葉が中心）に多いが、中部地方の一部（とくに山梨）からの旅行も多いことがわかる。

これに対して、地図6の栃木（日光など）はやや北に寄っており、東北地方の一部（山形、福島）、中部地方の一部（新潟、静岡）からも旅行が行われていることがわかる。

地図7の三重は、伊勢神宮の外宮、内宮、真珠島、島羽水族館などを中心とした地域で、静岡、岐阜、愛知、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫の範囲で、とくに、滋賀、大阪、京都からの旅行が多くなっている。

地図8の東京は、神奈川と合わせた日程で旅行されることも多く、北海道、福島、栃木、茨城、東京（島しょ部）、長野、山梨、静岡のうち、とくに中部地方の長野、山梨、静岡の学校に人気が高くなっている。

これに対して、もうひとつの大都市、大阪は、地図9に示すとおり、福井、和歌山、鳥取、徳島からの旅行が多いものの、奈良や京都と合わせて、あるいはつけ足しのようなかたちで回られることも多く、もはや、大阪城や大阪空港、エキスポランドなどだけでは魅力に乏しくなっていると思われる。

地図10の広島(平和公園、原爆ドームなど)、地図12の長崎は、平和や原爆に対する関心の高まりによって、近年修学旅行が増加してきたと思われる地域であるが、広島は、奈良、京都、大阪、兵庫、島根、山口、愛媛、福岡、大分と西日本に広がっているものの、奈良と島根が多い程度で、長崎にいたっては、九州

内の福岡、大分、佐賀、熊本、長崎(島しょ部を含む)に限られている。

最後に地図11の仙台の青葉城、松島などの宮城県は、東北地方の青森、岩手、秋田、山形、福島にみられ、とくに、岩手、秋田、山形、福島では半数以上の学校の行き先となっている。

このように、日本全国各地に行き先が分散しているけれども、やはり、「修学旅行のメッカ」はいまだに存在しているのである。

つぎには、こうした「メッカ」だけではなく、全国的に、まとめの意味もこめて、修学旅行の行き先についてふれておこう。

都道府県別マップおよび日程

表6は全国の47都道府県についてそれぞれ修学旅行の行き先を示したものである。さらに、この表を地図化したものが地図13であるが、より見やすくするために3つの地図に分けてみた。それが地図14、15、16である。

ここでは、これらの表や地図をもとに、各都道府県別の修学旅行の行き先についてみていこうと思う。

まず、北海道においては、ここはほとんどひとつの地方とっていいほどの広さであり、したがって、日程も道内、とくに札幌を中心としたものになりやすい。また、札幌とその郊外を合わせたコースもみられる(日程図1)。

これに対して、津軽海峡をへだてた青森では、90%もの学校が函館付近を訪れており、本州内にとどまる学校は少ない(日程図2)。

岩手、秋田、山形、福島については、前述したように仙台・松島コースが多いが、宮城では福島(会津若松、猪苗代湖など)コースが多くなっている(日程図3~7)。

関東地方も、前述したように日光と箱根・鎌倉コースが多いが、栃木は箱根・鎌倉へ、

神奈川は日光へと相互に行きあうかたちとなっている(日程図8~14)。

新潟は佐渡を含む県内か福島(会津若松など)が多い。富山、石川については80%以上が県内か日帰り旅行で、移動教室やハイキングとなっている(日程図15~17)。

山梨、長野、静岡は東京コースであり、福井、岐阜、愛知を境として京阪神奈良三重コースへと転じてくる(日程図18~23)。

京阪神や広島以外のコースがでてくるのは、高知の香川(高松・屋島・栗林公園)コース、愛媛の高知(桂浜・室戸岬)コース、山口、愛媛の大分(別府)コース、長崎の熊本(阿蘇を含む)コース、宮崎の鹿児島(指宿)コース、鹿児島の宮崎コースなどがある(日程図35、38~46)。

最後に沖縄は、沖縄本島内の小学校が南部中部北部をめぐるコースと離島(西表島など)に出かけるコース、さらには、離島の小学校が本島に出かけるコースなどがある(日程図47)。

表6・都道府県別行き先

(%)

1. 北海道	札幌44.6 小樽25.7 洞爺21.6	25. 滋賀	伊勢80.0 奈良40.0
2. 青森	函館90.0	26. 京都	伊勢58.8 大阪23.5 奈良23.5 府内23.5
3. 岩手	仙台・松島77.3	27. 大阪	伊勢72.4
4. 宮城	会津若松91.7	28. 兵庫	伊勢48.4 奈良45.2 京都22.6 広島22.6
5. 秋田	仙台・松島64.7	29. 奈良	広島55.6 大阪22.2 京都22.2
6. 山形	仙台・松島50.0	30. 和歌山	奈良100.0 大阪85.7 京都71.4
7. 福島	仙台・松島50.0	31. 鳥取	京都60.0 大阪60.0 奈良40.0
8. 茨城	日光31.8 箱根・鎌倉27.3 東京18.2	32. 島根	広島88.2
9. 栃木	箱根・鎌倉72.7 東京40.9	33. 岡山	奈良69.6 京都69.6
10. 群馬	箱根・鎌倉92.9	34. 広島	奈良52.2 京都52.2
11. 埼玉	日光54.8 箱根・鎌倉29.0	35. 山口	別府43.8 広島31.3
12. 千葉	箱根・鎌倉66.7 日光24.2	36. 徳島	奈良90.0 大阪90.0 京都100.0
13. 東京	日光53.8	37. 香川	奈良100.0 京都100.0
14. 神奈川	日光91.3	38. 愛媛	別府50.0 熊本・阿蘇50.0 広島16.7 高知25.0
15. 新潟	県内(佐渡含む)41.7 会津若松36.1	39. 高知	香川76.9
16. 富山	県内80.0	40. 福岡	長崎52.2 別府26.1 熊本・阿蘇26.1 広島13.0
17. 石川	県内100.0	41. 佐賀	長崎85.7
18. 福井	奈良100.0 大阪88.9 京都100.0	42. 長崎	熊本・阿蘇41.2 県内41.2
19. 山梨	東京80.0 箱根90.0	43. 熊本	長崎81.8
20. 長野	東京88.2 箱根35.3	44. 大分	熊本・阿蘇39.1 長崎34.8 宮崎21.7 広島26.1
21. 岐阜	奈良77.3 京都72.7	45. 宮崎	指宿85.7
22. 静岡	東京70.8 箱根16.7	46. 鹿児島	宮崎56.3 -
23. 愛知	奈良83.8 京都78.4	47. 沖縄	県内71.4
24. 三重	奈良78.3 大阪43.5 京都87.0		

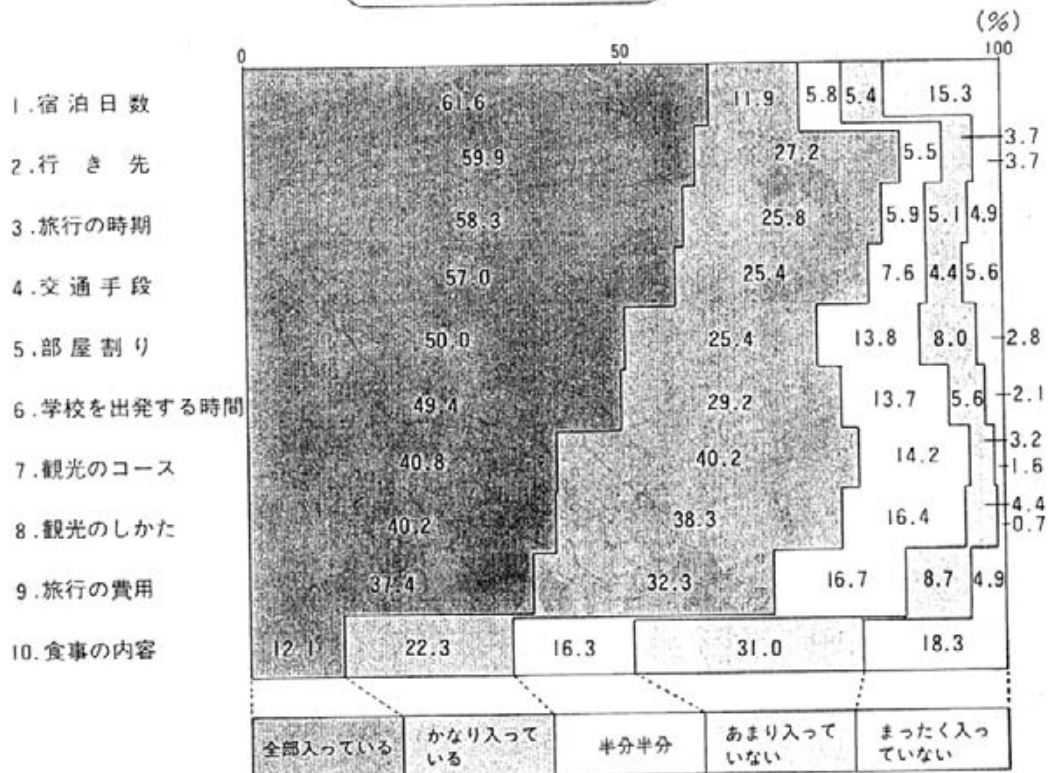
学校はどこまで決めるのか

このように、いくつかの「修学旅行のメッカ」とよばれるような地域があるにせよ、行き先がかなり多様性に富んでいるのは、学校独自の判断がはいっているためなのであろうか。図2は、つぎのようなことを決めるのに、学校独自の判断がどれくらい入っているかどうかをたずねたものである。とくに、2. 行き先に注目すると、「全部入っている」60%、「かなり入っている」27%と合わせて87%もの学校では、行き先について学校独自の判断がかなり入っているとこたえているのである。

しかしながら、行き先は多様ではある一方、昔ながらの伝統的なコース、日程の修学旅行も多数存在しているところから、学校独自の判断としてコースや日程などを変えない。そして、コースや日程を変えないことが、学校独自の判断となってしまっていると言えないであろうか。

学校文化のひとつとして伝統的な修学旅行のスタイルが継承されていく基盤が、ここにあるように思われる。

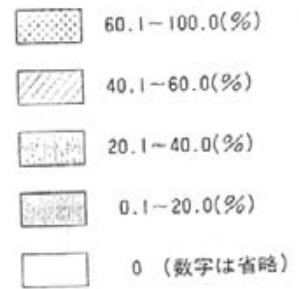
図2・学校の独自性



地図5
 神奈川(箱根・鎌倉など)
 旅行圏(9.3%)



地図6
 栃木(日光)旅行圏(8.0%)



地図7

三重(伊勢)旅行圏(7.0%)



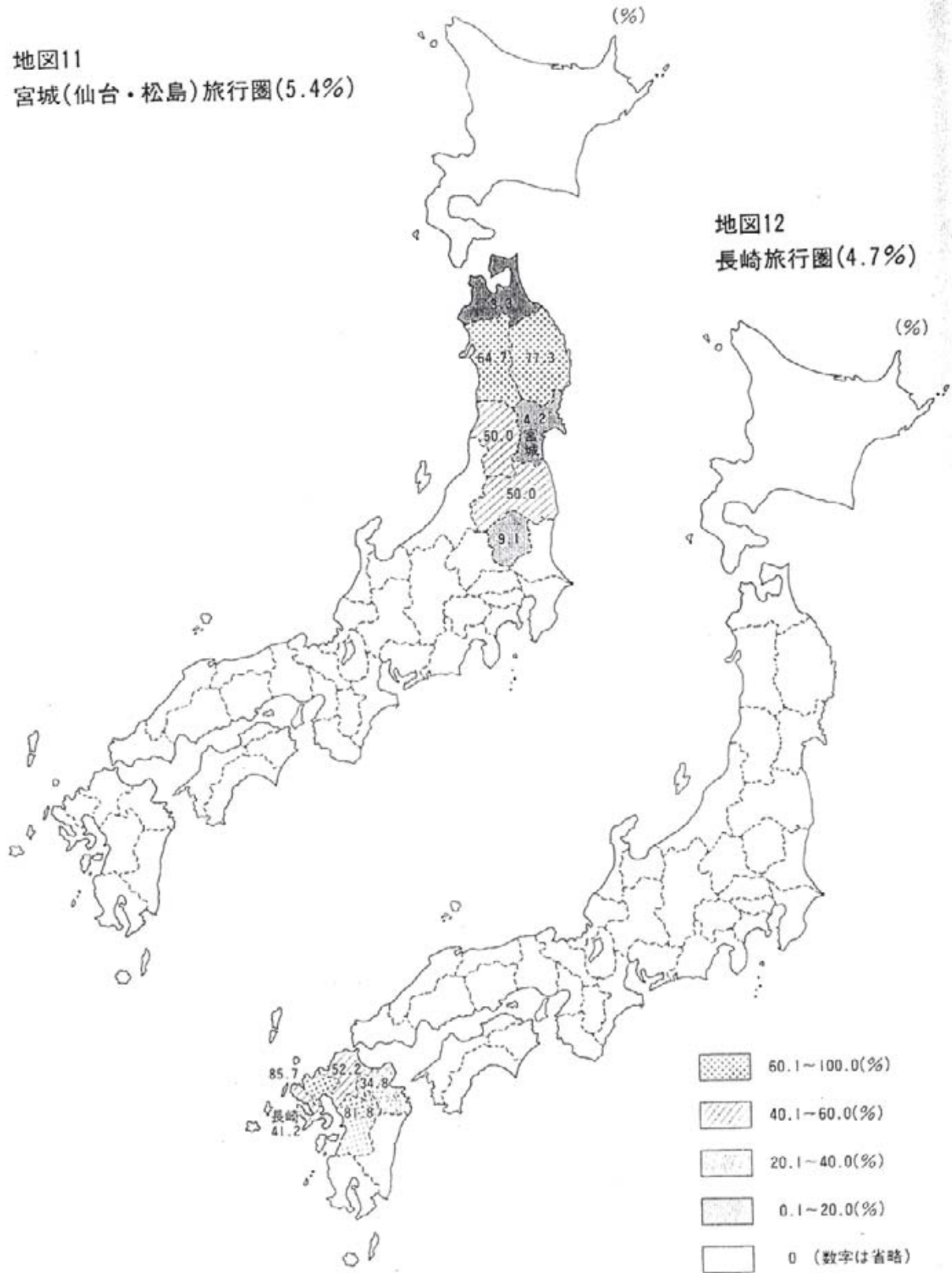
地図8

東京旅行圏(6.3%)



地図11

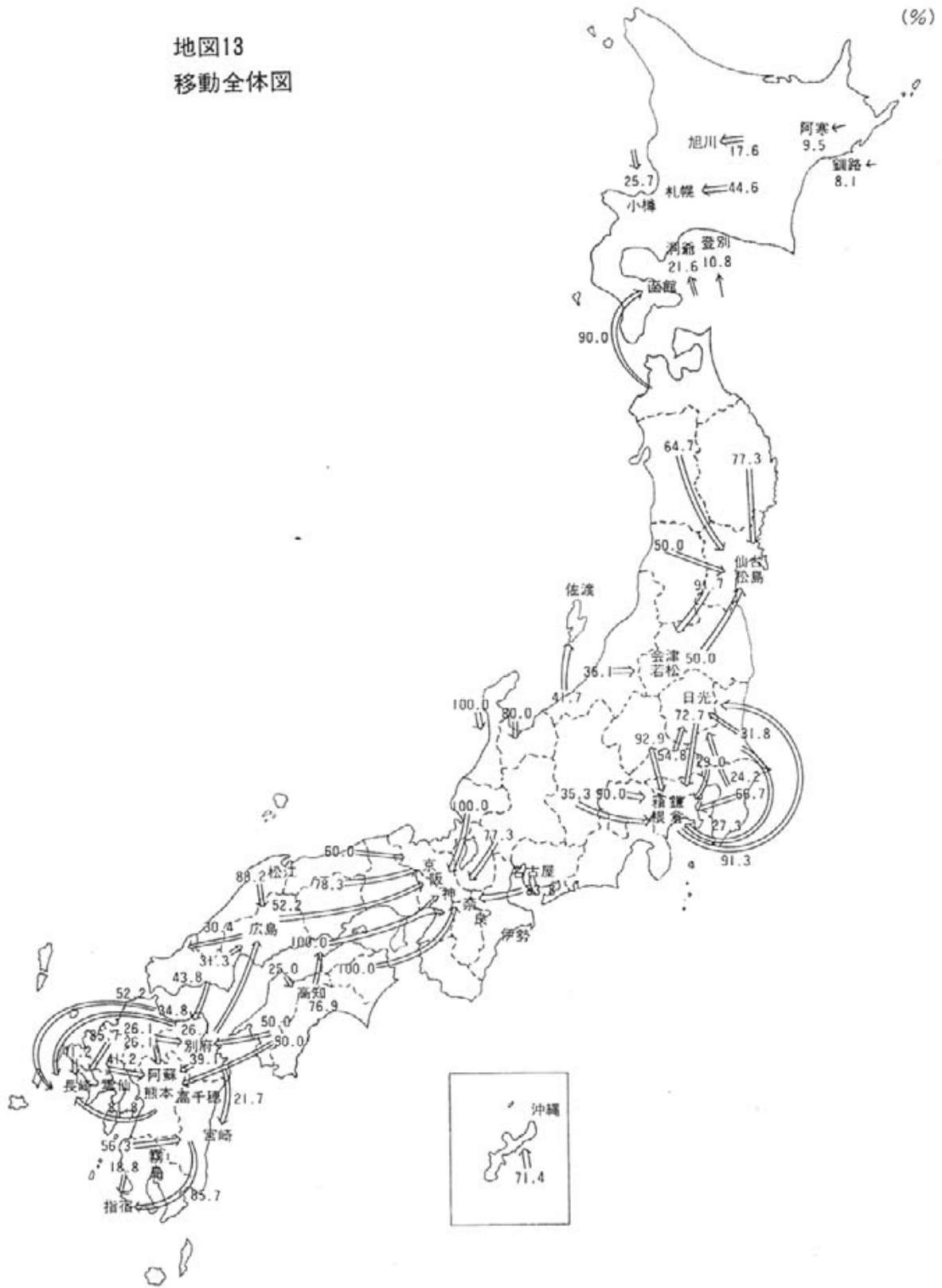
宮城(仙台・松島)旅行圏(5.4%)



地図12

長崎旅行圏(4.7%)

地図13
移動全体図



5)

地図15
移動部分図B



地図16
移動部分図C



4. 修学旅行のもつ意味



これまでの中で、日本各地でどのような修学旅行が行われているかが明らかになってきた。日程やコースからもわかるように、それぞれの学校でさまざまな教育的意図をもって

行われていると思われる。これからは、修学旅行の意義を探り、児童にとって修学旅行はどのような意味をもつのか、明らかにしていきたい。

修学旅行の価値

図3に示されている項目は、ほとんどどの学校でも行われている代表的な学校、学年行事である。この図は、さまざまな行事が、学校の中でどれほど重要であると考えられているかをみたものである。

卒業式、入学式、運動会について、修学旅行は第4位。半数以上が「とても重要」と考えており、「わりと重要」までを含めると、9割を超えている。学校行事として長い伝統をもつものであるし、小学校修了学年で宿泊を伴って行われるということを考えてみても、その重要度は高く、さまざまな教育的価値があると考えているのであろう。

その価値がどんなものであるか、具体的にたずねたものがつぎの図4である。まず第一に、集団生活の貴重な体験の場として修学旅行を位置づけており、つぎに、実地学習として、実物を見たり、文化遺産にふれさせること。さらに規律を守る。そして、児童相互の、または教師とのふれ合いをと、修学旅行に対する期待は大きい。

一方、自主的な行動とか、今までの学習を深めるといった児童の側からの自発性をみるような項目は、下位にきている。そして、体や心を鍛練するという集団訓練については、あまり役立たないとしている。

図3・学校行事の重要度

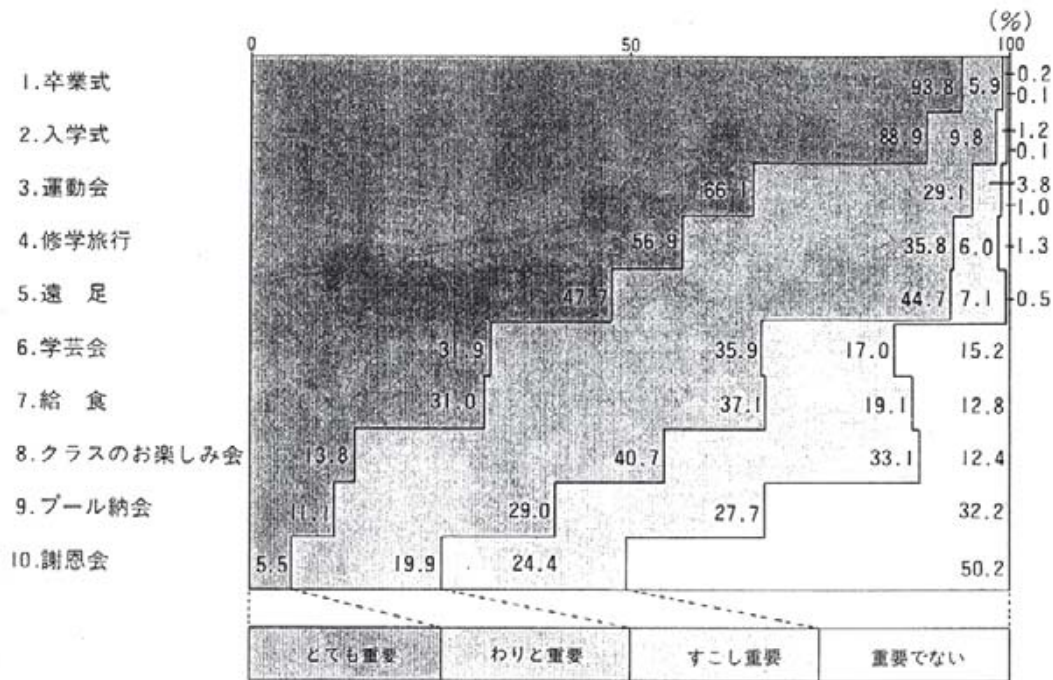
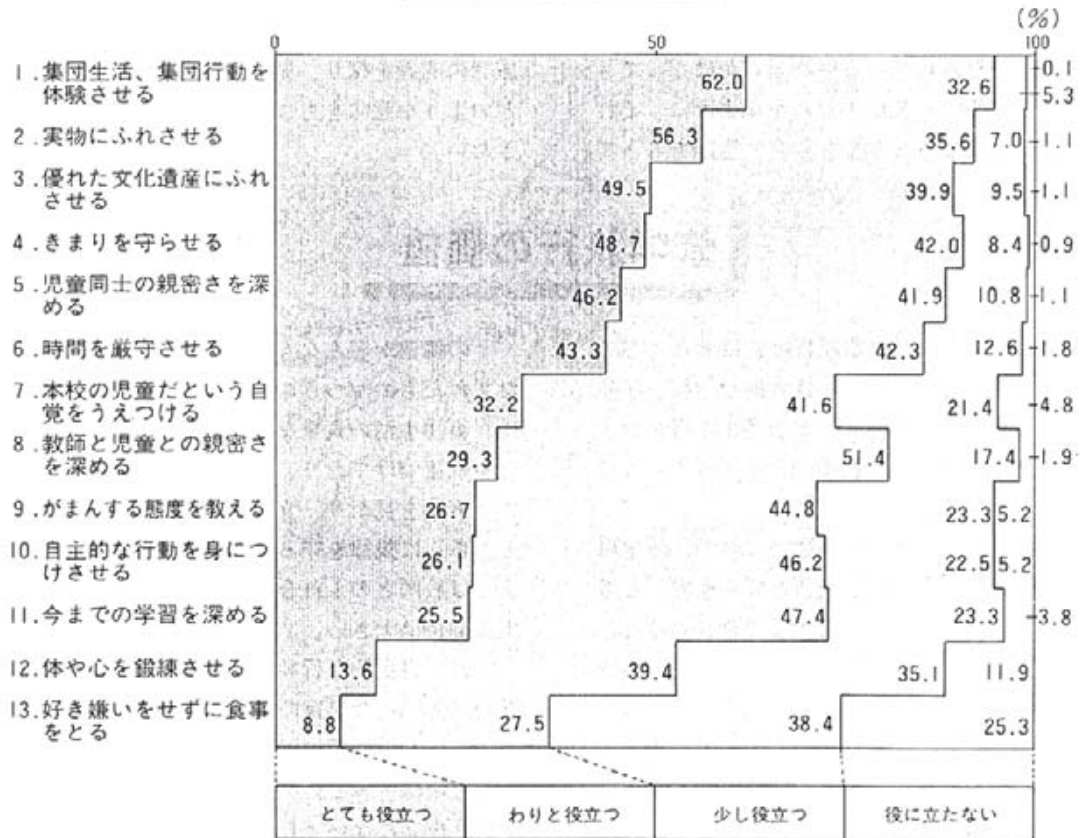


図4・修学旅行の価値

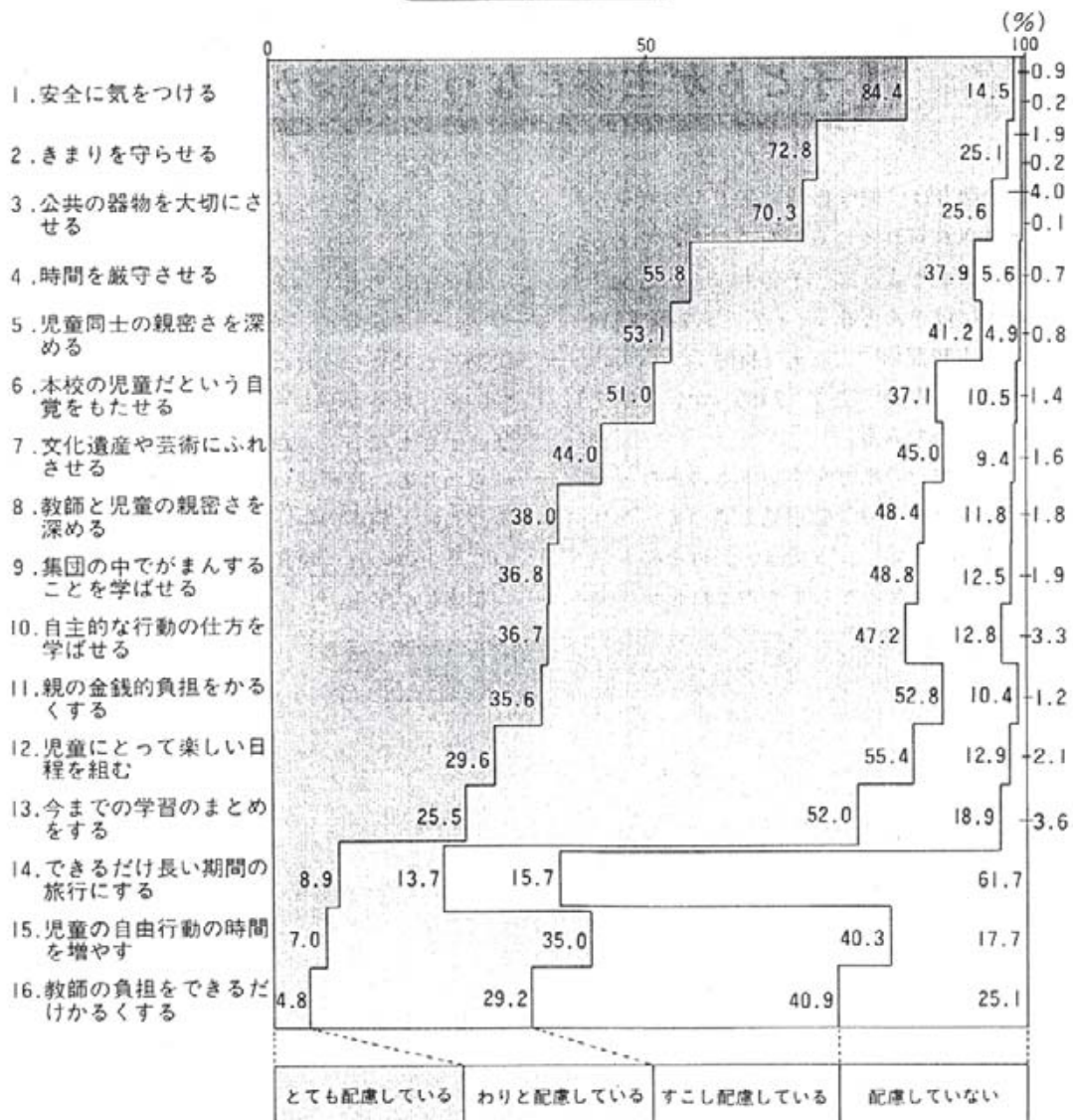


価値の実現

さて、以上のような価値を考え、学校はどのように修学旅行を行っているのでしょうか。図5には、学校が修学旅行を行う際の配慮が示されている。図からわかるように、安全面での配慮が84%（とても配慮している）とト

ップにきている。多くの子どもたちを、バスや電車を使って遠くまで連れていき、宿泊までするのであるから、安全面については、神経質と思えるくらいの配慮が必要なのであろう。

図5・学校の配慮



しかし、以下、順に「きまりを守らせる73% (2位)」「公共の器物を大切にさせる70% (3位)」「時間を厳守させる56% (4位)」と追っていくと、しだいに制服、制帽、旗をもって一列に並んで、というような修学旅行の光景が眼に浮かんでくる。実際、子どもたちを引率していると、安全管理面に注意がいきがちではあるが、あまりにも教師がひきずり回しているような感じもする。短期間の旅行ではあるが、「自主的な行動を学ばせ37% (10位)」「児童の自由時間を増やし7% (15位)」「ゆったりとした生活時間9% (14位)」

の中から、児童に身をもって体験させ、気づかせ、自覚をうながしていくことが大切だと思われる。

図4と図5を総合してみると、学校は修学旅行に大きな教育的価値を認め、その価値実現のためにいろいろな配慮をしているという姿がみられる。しかし、配慮がいき届きすぎて、焦点がぼけそうな感じがしないでもない。やはり、旅行の主体である子どもをどう生かしていくかという視点が必要となってくるように思われてならない。

子どもが主体となっているか

つぎの図6は、修学旅行に子どもの意見がどうとり入れられているかをみたものである。

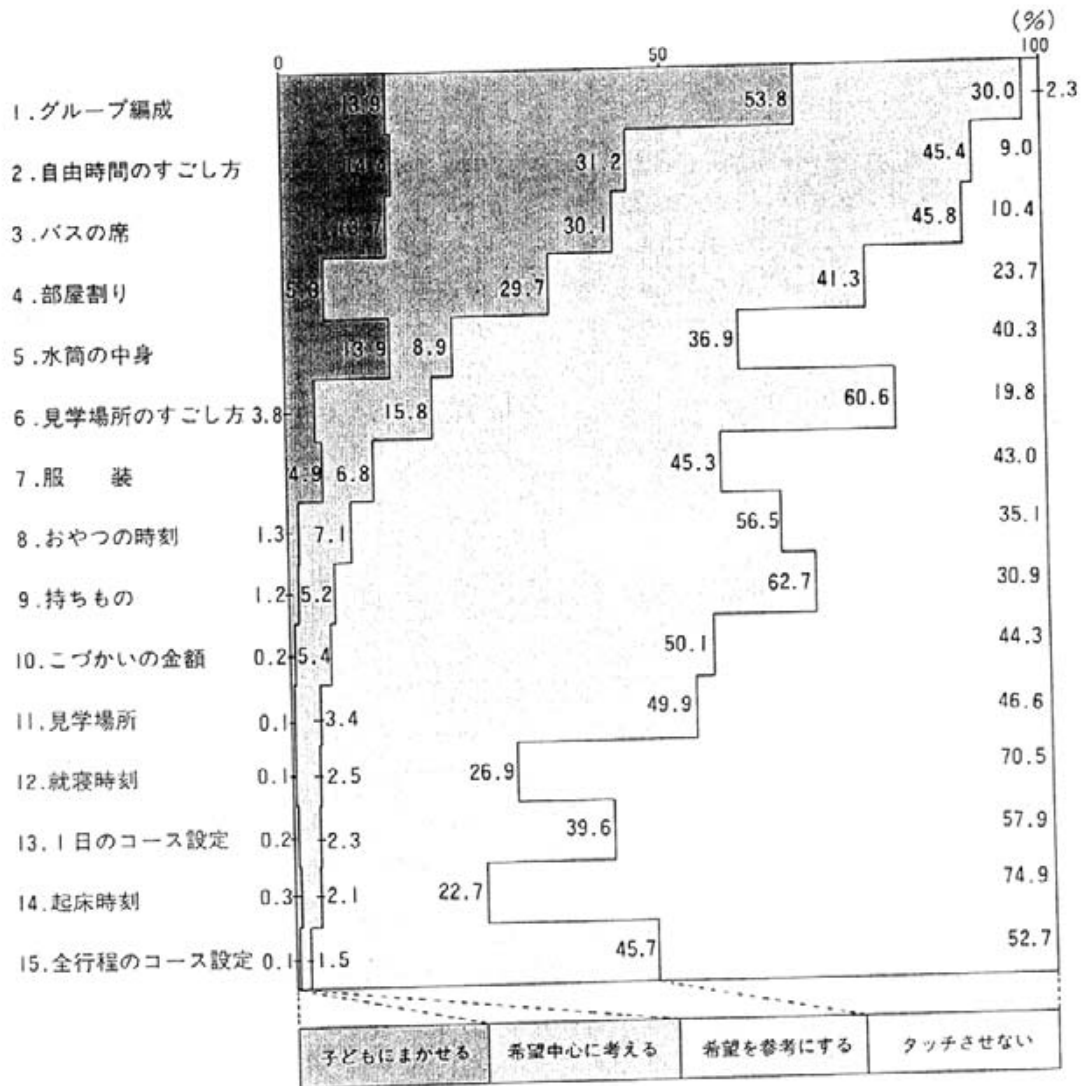
図からわかるように、子どもにまかされているものはほとんどなく、「グループ編成(14%)」「自由時間のすごし方(14%)」「バスの席(14%)」「水筒の中身(14%)」が、1割を超えるくらいである。

実際、集団での旅行を実施するにあたって、子どもたちのバラバラな意見を聞いていたり、子どもにまかせてしまっただけでは、旅行そのものが成り立たなくなってしまうのはたしかであろう。しかし、あまりに決めすぎても、

旅行の主体がどこにあるのかわからなくなってくる。

具体的に考えてみると、これらの項目の中で、コース設定や、それに伴う起床時刻は決められていなければならないものであろうが、それ以外は、もっと子どもの声を聞いたほうが、子どもたちにまかせたりしてもいいように思われる。長年続いてきた大きな行事であるために、教師の中に修学旅行のイメージが作り上げられ、硬直化してしまっているような感じがする。

図6・子どもの意見の尊重度



実施してみた

つぎの図7は、本年度の旅行実施後の先生方の感想である。

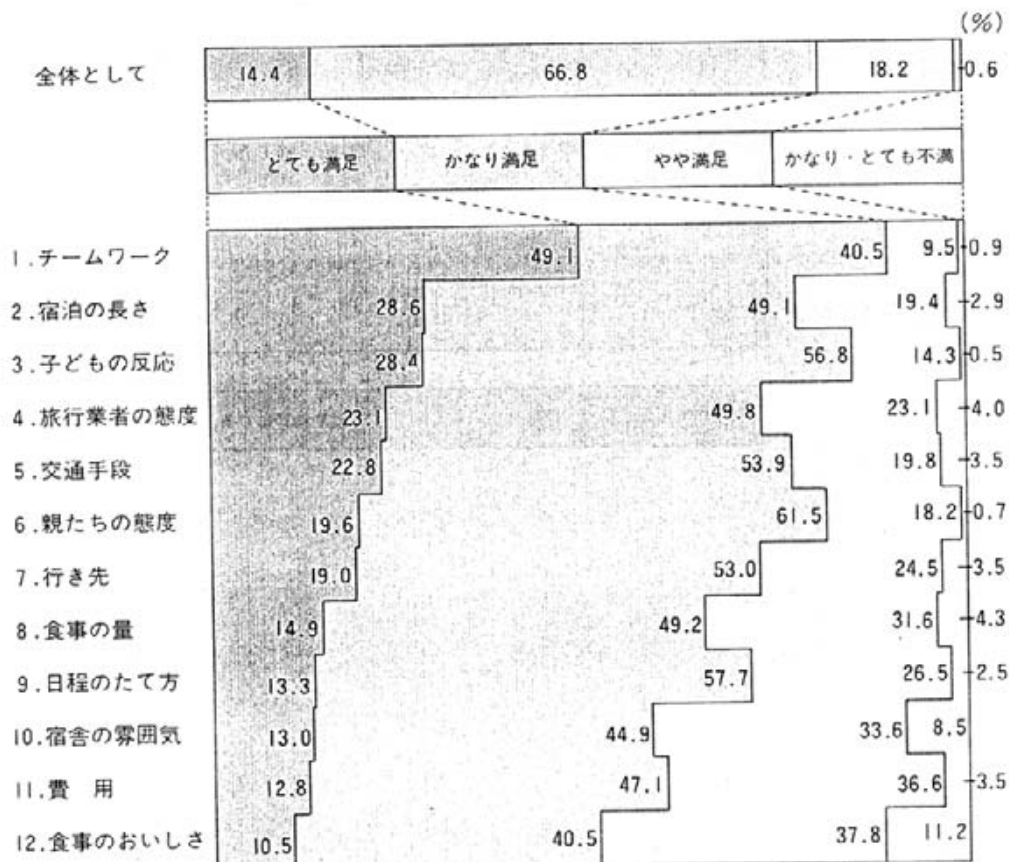
項目別にみていくと、先生方同士の「チームワークにとっても満足した」というのが49%とトップにきている。先生たちも、宿泊を伴う旅行の中で、ふだんのつき合いでは見られないお互いの良さを発見し合ったのかもしれない。

その他の項目はどれも不満は少なく、満足も少ない。まあまあ満足であるという数値が並んでいる。しいて不満を言えば、「食事の

改善をして、もう少し安く、いい宿舎であれば」というところである。

それと同様に、全体的な感想でも、不満は0.6%と、ほとんどない。しかし「とても満足」も14%にとどまっている。その一方で「かなり満足」が67%と高い数値を示している。つまり、何かひとつの試みがなされ、その成功による充実感ではなく、「無事に日程を消化し、子どもたちも喜んでいた」という満足感のようである。

図7・旅行を実施して(満足度)



5. 理想の修学旅行



これまでみてきたように、修学旅行は、新しい方向を見いだすことなく、昔からの伝統を引き継ぎ、行われているようである。ここでは、子どもをとりまく環境の変化の中で、修

学旅行もまた変わろうとしているのかどうか探り、理想の修学旅行についても考えていきたい。

なぜ修学旅行は変わらないのか

まず、これまで何年間か修学旅行を行ってきた中で総合的な評価をみたものが、図8である。

まず目をひくのは、先生方が「子どもたちは修学旅行をととても楽しみにしている」と感じている点である。調査校中、96%が「とても感じた」とし、「わりと感じた」を含めると100%に達する。そして、修学旅行で達成されたものも大きかったとしている。まず、寝食を共にすることから、接触における評価が高い。「子どもたちの思いがけない一面をみた」が、「わりと感じた」を含めると、93

%にのぼり、「子どもと話げできた(87%)」となっている。さらに、「クラスのまとまりを感じた(84%)」「リーダーが育った(63%)」と、学級集団を形成する面からも、大きな価値を見いだしていた。

つまり、子どもの側からの不満もないし、現状でも十分に目的を達成できていると感じているのである。

また一方では、準備のたいへんさ(81%)、交通事故や迷子の心配をしていた(69%)など、精神的にも肉体的にも、疲労を感じている。そうした中で、さらに「理想の修学旅行

は、などと考える余裕もないのが現状の姿なのであろう。

図9でも示すように、先生たちはかなり疲れる(62%)が、やりがいもあり(52%)、楽

しみにもしている(28%)。だから、内容を変えたり、廃止したりという気持ちは、ほとんどないと考えている。

図8・総合的評価

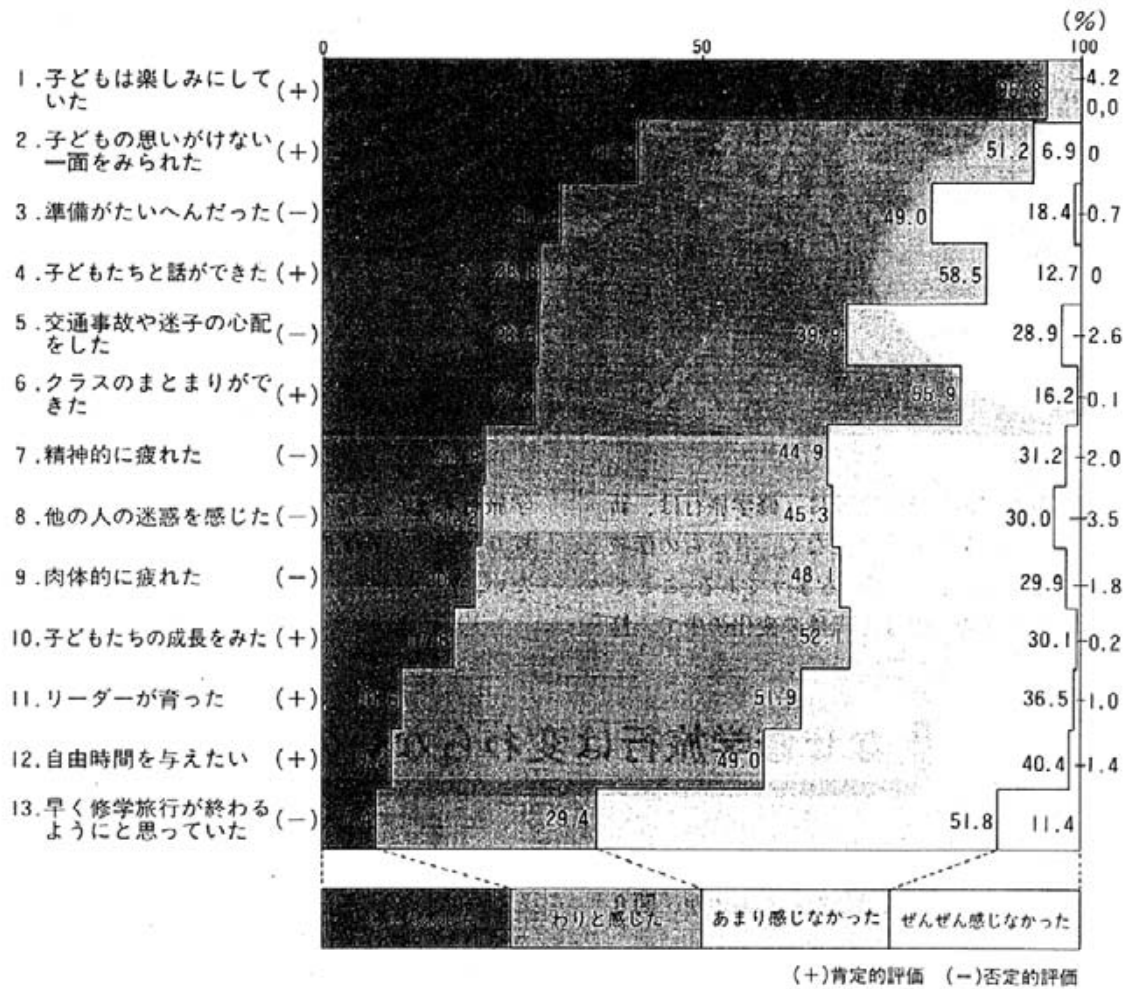
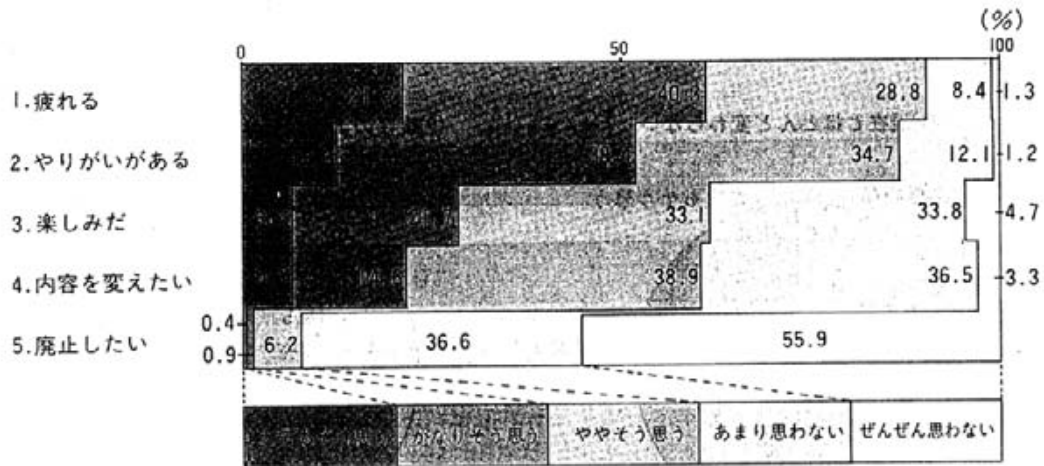


図9・引率者の意識



変化のきざし

今後の修学旅行の姿をたずねたものが図10-1である。ここからも現在とほとんど変わらないとするものが66%にのぼり、逆に、なんらかの形で変化するだろうと考えているものが34%となっている。

そして、変化の方向を聞いた図10-2では、変化するだろうとこたえた割合とほぼ同程度の35%が、移動教室や、キャンプのようなかたちで変わっていくのでは、という考えをもっている。しかし、それ以外の項目では肯定率は低く、形態としては、あまり変化しないとみている。

一方、内容面をたずねても、図10-3に示すように、「とてもそう思う」としている割合は低く、積極的な改善姿勢はみうけられない。しかし、「わりとそう思う」を含めると、「ありきたりのプランから手づくりのプランを」と考えているものが72%。「もっと児童の考えをとり入れるようになるだろう」51%など、変化に対して受け入れの姿勢はできているような印象を受ける。

地図17は、過去6カ年の間にどのくらいの学校が行き先を変更したかということを一県別に表したものである。変更率が35%と全国トップの大分県では、調査校23校中8校が行き先を変えたことになる。全国的には変更率は低く、毎年同じところに同じコースで行く学校が多い。しかし、そうした状況の中で、いくつかの学校では、よりよい姿を求めて模索し始めている雰囲気がかがえる。

また表7は、理想の修学旅行について、時期などをたずねたものである。時期、費用についてはほぼ現状通りとするものの、日程については、1泊2日が現状の78%から57%へと減り、2泊3日が19%から38%と増えているように、もう少し長くしたいという希望もかがうことができる。

そして、現在でもいくつかの学校では新しいかたちでの修学旅行（移動教室など）を行っているのである。以下、代表的な例をあげておく（日程図48～57）。

図10-1・今後の修学旅行の姿

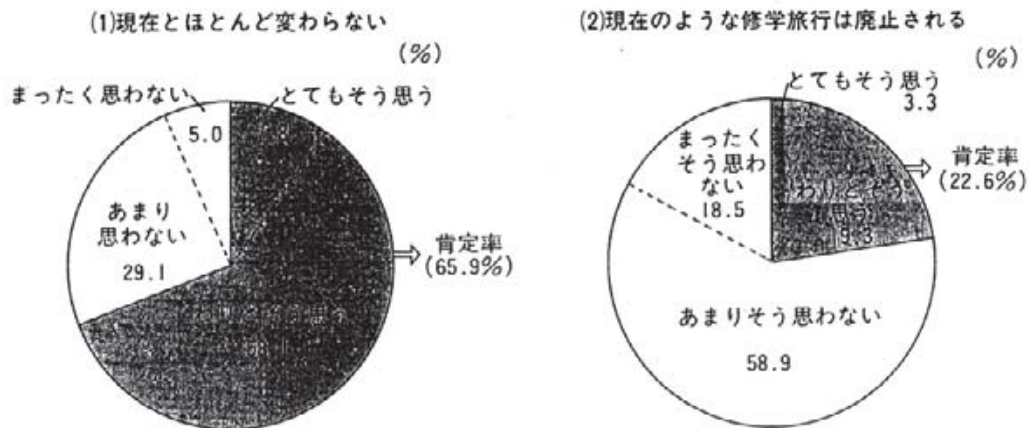


図10-2・変化の方向(形態)

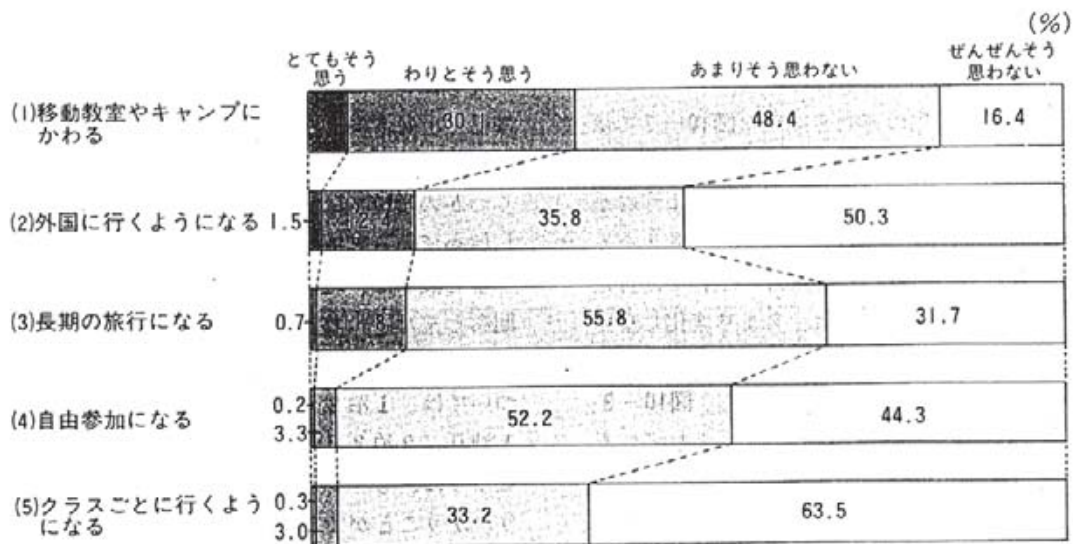


図10-3・変化の方向(内容)

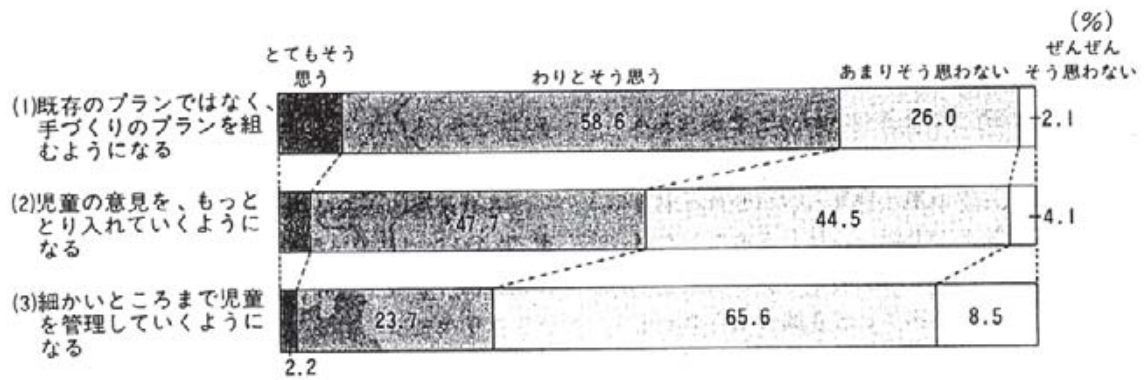
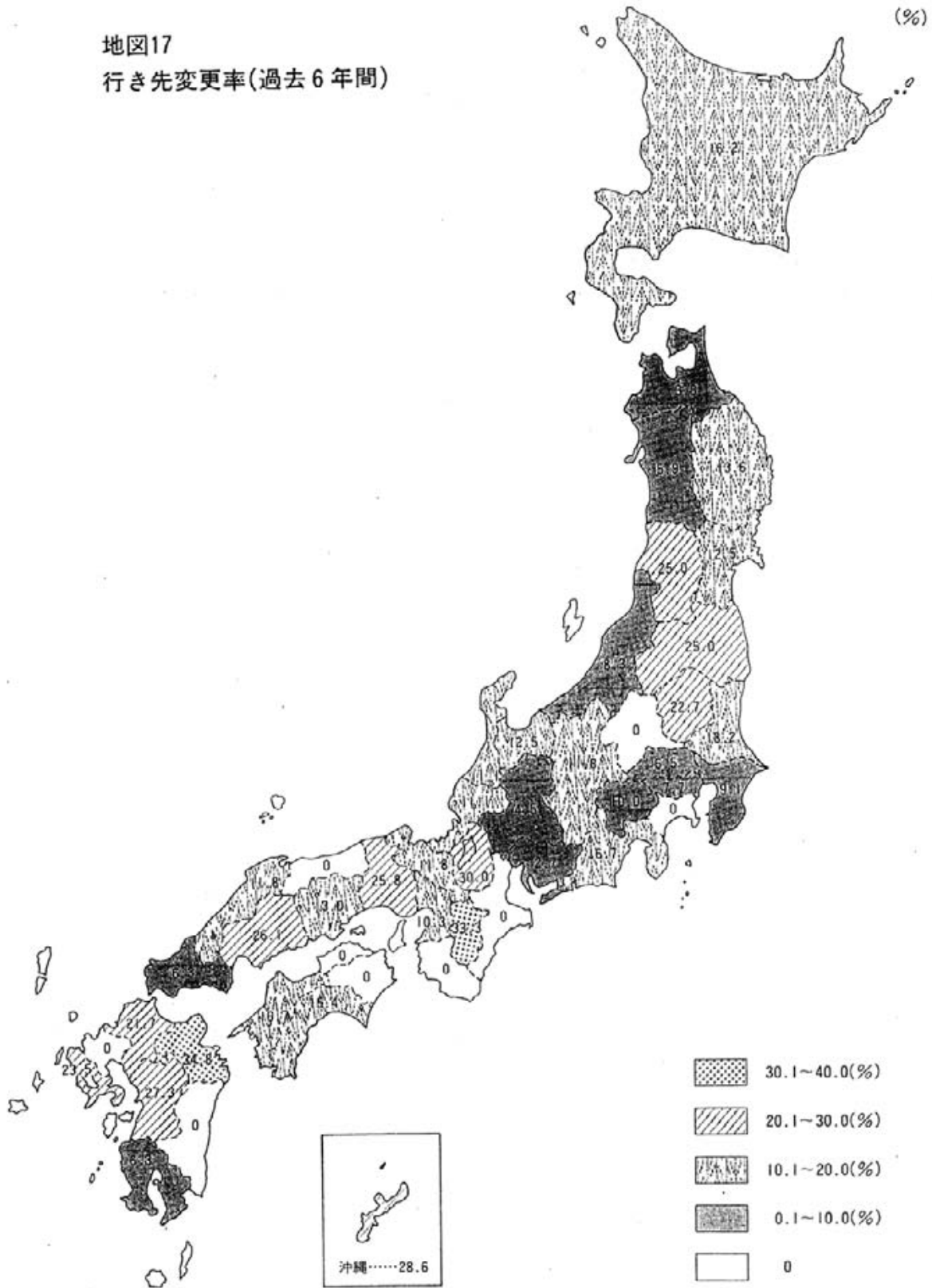


表7・理想の修学旅行(時期・日程・費用)

		現在	理想
1. 時期	6年生5月	47.3	41.5
	6年生10月	14.2	27.2
2. 日程	日帰り	2.0	1.0
	1泊2日	77.7	56.8
	2泊3日	18.6	37.6
	3泊4日	1.5	3.3
3. 費用	平均	14,077.2円	15,920円

地図17
行き先変更率(過去6年間)



ま と め に 代 え て

修学旅行は宿泊を伴う。いろいろな友だちと一緒に。家を離れる。見知らぬ世界に旅する。集団生活がある。——など、その中にいろいろな要素を含んでいる。そして、そこに含まれている教育的価値はさまざまであり、非常に大きなものがあると思われる。

かつてのように、交通が発達しておらず、家族での旅行もあまり行われていない時代においては、修学旅行は、名所、旧跡めぐりでもよかったし、他県に行くことでさえも、その意義は十分に果たしたものであったろう。

しかし、今日のように、国内はむろんのこと、外国に行ったことのあるような子どもすらいる中では、修学旅行の意義は、大きく変化してきていると考えられる。

本調査を行いながら感じたことは、そのような状況の中で、全国のほとんどの学校が、修学旅行の意味を問い直さないうまま、かつてと同じような修学旅行を続けているという事実であった。本調査では、ここには示さなかったが、地域や学校規模により、修学旅行の目的や取り組みがちがうのではないかと考え、検討を加えてみたのだが、そこにははっきりとした差がみられなかった。小規模校も大規模校も、山村の学校も都心の学校も、ほぼ同じようなスタイルで修学旅行を行っている。

修学旅行を問い直して考えてみると、ただ観光地に行っただけでなく、おみやげを買って帰るといっただけでなく、その地域や子どもの状況に応じて、学校独自のプログラムを入れていくことが必要なのではないかと思われてくる。

たとえば、体力への挑戦を目的として山登りを計画の中に入れるとか、児童の自主性を育てるために、日程だけを決めておき、あと

はグループ活動をさせるとか、都会の学校の場合には、社会科または理科学習のまとめとして、「星の観察」や「地層」の学習などを組み入れるなど、いろいろなことが考えられる。

そして、一方では、修学旅行という雰囲気も味わわせたい。家族と離れて宿泊するのは初めてであろうから、帰りに家族におみやげを買わせたいし、友だちとゆっくり遊べるような自由時間もとってあげたい。また、一カ所くらいは名所・旧跡の見学を……などと考えていくと、今のようない泊2日の旅では短いと思われる。親の金銭的負担などいろいろな問題はあろうが、せめて2泊3日くらいの日程をとり、1日目は名所・旧跡の見学。2日目は学校独自の計画に従って生活させ、3日目にはおみやげを買って帰る、というような旅行も考えられるのではないだろうか。

いずれにしても、学校が独自の目的をもち、主体的に修学旅行をつくり上げていってほしいと思われる。

もっとも、キャンプなどでも、日本の場合、朝早く起床して朝の集いをし、そして夜までこまかなスケジュールがつまり、帰宅前日はキャンプファイア—といったパターンが一般化している。そして、それぞれに個性をもった運営をしている欧米のキャンプと、いちじるしい対比を示している。

したがって、ひとつにパターン化し、変化に乏しいのは修学旅行に限られていない感じがする。しかし、そうしたパターン化がつまりつると、学校文化の硬直化を生み出してくる。そう考えると、修学旅行のあり方に検討を加えることは、修学旅行だけにとどまらず、学校のあり方を考えるための一助となるように思われてならない。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。